

日汉对照名家经典作品

# 哥儿

坊っちゃん

[日] 夏目漱石 著  
林少华 译



中国宇航出版社

日汉对照名家经典作品

# 哥儿

坊っちゃん

[日] 夏目漱石 著  
林少华 译



中国对外翻译出版公司

· 北京 ·

版权所有 侵权必究

图书在版编目 (CIP) 数据

哥儿/(日)夏目漱石著. 林少华译. —北京: 中国宇航出版社, 2008.5

(日汉对照名家经典作品)

ISBN 978-7-80218-359-9

I. 哥... II. ①夏...②林... III. ①日语—汉语—对照读物②长篇小说—日本—现代 IV. H369.4: I

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2008) 第 040776 号

策划编辑 楚晓琦 封面设计 03 工舍

责任编辑 楚晓琦 责任校对 梁月红

出版  
发行 中国宇航出版社

社址 北京市阜成路8号 邮编 100830  
(010)68768548

网址 [www.caphbook.com/www.caphbook.com.cn](http://www.caphbook.com/www.caphbook.com.cn)

经销 新华书店

发行部 (010)68371900 (010)88530478(传真)  
(010)68768541 (010)68767294(传真)

零售店 读者服务部 北京宇航文苑  
(010)68371105 (010)62529336

承印 三河市君旺印装厂

版次 2008年5月第1版 2008年5月第1次印刷

规格 880×1230 开本 1/32

印张 6.875 字数 197千字

书号 ISBN 978-7-80218-359-9

定价 17.80元

本书如有印装质量问题, 可与发行部联系调换




## 夏目漱石和他的作品（代译序）

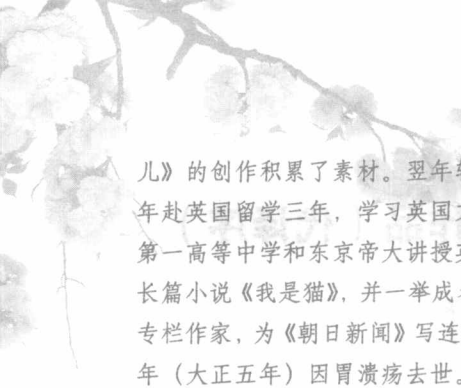
林少华

除了对职业教师，日本人一般不以“先生”称呼别人，对文学家也是这样。但对夏目漱石是个例外，习惯上称为“漱石先生”，大约同我们中国人习惯上称鲁迅为“鲁迅先生”相若。较之客气，这里边显然含有尊之为师的敬意。实际上，夏目漱石在日本人心目中的地位也同鲁迅在中国人心目中的地位差不多。但鲁迅研究，无论在中国还是在日本都属于显学。不仅《鲁迅全集》被一篇不少地译成了日文，《故乡》还被收入了日本中学“国语”（语文）教科书——不知道鲁迅先生的日本人估计占不到多数。但相比之下，夏目漱石在中国就没有那么幸运了（当然个中原因多多，很难单纯比较）。人们或许知晓川端康成和大江健三郎，但知道漱石的，除了大学中文、外文系师生和文学爱好者，恐怕不会有多少人。

然而毫无疑问，漱石是日本近代文学史上一座卓然特立的高峰。他活跃的 20 世纪初期（明治与大正之交），日本文坛可谓群星灿烂。就小说家来说就有森鸥外、岛崎藤村（亦是诗人）、田山花袋、正宗白鸟、永井荷风等人。但作品至今仍为人津津乐道的，说得夸张些，恐怕唯漱石一人而已。难怪被日本人称为“国民大作家”，其头像赫然印在日本千元纸钞的正面，人们几乎无日不同这位大作家“打交道”。

夏目漱石，原名夏目金之助，1867 年（庆应三年）生于江户（现东京）一小吏家庭，14 岁入二松学舍系统学习“汉籍”（中国古籍），浸润了东方美学观念和儒家伦理思想，奠定了日后文学观和人生观的基础。写“汉诗”（汉语古诗）是其终生爱好和精神寄托。“漱石”之名，即出自《晋书·孙楚传》中“漱石枕流”之句。21 岁就读于第一高等中学本科，23 岁入东京帝国大学（现东京大学）英文专业学习。其间因痛感东西方文学观的巨大差异而陷入极度的精神苦闷之中。1895 年赴爱媛县松山中学任教，为日后《哥





儿》的创作积累了素材。翌年转赴熊本县任高级中学讲师。1899年赴英国留学三年，学习英国文学和教学法。回国后先后在东京第一高等中学和东京帝大讲授英文，同时开始文学创作，发表了长篇小说《我是猫》，并一举成名。1907年进入朝日新闻社任小说专栏作家，为《朝日新闻》写连载小说，一直笔耕不辍，直至1916年（大正五年）因胃溃疡去世。是年仅49岁。

漱石从事文学创作的时间并不很长，从38岁发表《我是猫》到49岁去世，也就是十年多一点时间，却给世人留下了大量有价值的作品。他步入文坛之时，自然主义文学已开始在日本流行，很快发展成为文坛主流。不过日本的自然主义不完全同于以法国作家左拉为代表的欧洲自然主义，缺乏波澜壮阔的社会场景，缺乏直面现实的凌厉气势，缺乏粗犷道劲的如椽文笔，而大多囿于个人生活及其周边环境的狭小天地，乐此不疲地直接暴露其中阴暗丑恶的部位和不无龌龊的个人心理，开后来风靡文坛（直至今日）的“私小说”、“心境小说”的先河。具有东西方高度文化素养的漱石从一开始便同自然主义文学背道而驰，而以更广阔的视野、更超拔的高度、更有责任感而又游刃有余的态度对待世界和人生，同森鸥外一并被称为既反自然主义又有别于“耽美派”和“白桦派”的“高踏派”、“余裕派”，是日本近代文学真正的确立者和一代文学翘楚。随着漱石1916年去世及其《明暗》的中途绝笔，日本近代文学也就落下了帷幕。

以行文风格和主要思想倾向划线，作品可分为明快、“外向”型和沉郁、“内向”型两类。前者集中于创作初期，以《我是猫》（1905）、《哥儿》（1906）为代表，旁及《草枕》（1906）和《虞美人草》（1907）。在这类作品中，作者主要从理性和伦理的角度对现代文明提出质疑和批评。犀利的笔锋直触“文明”的种种弊端和人世的般般丑恶。语言如风行水上，流畅明快，幽默如万泉自涌，酣畅淋漓；妙语随机生发，警句触目皆是，颇有嬉笑怒骂皆成文章之势。后者则分布于创作中期和后期，主要作品有《三四郎》、《其后》、《门》（前期三部曲）和《彼岸过迄》、《行人》、《心》（后期三部曲），以及绝笔之作《明暗》。在这类作品中，作者收回伸向社会的笔锋，转而指向人的内心，发掘近代人内心世界的

不安、烦恼和苦闷，尤其注重剖析近代知识分子的“自我”、无奈与孤独，竭力寻觅超越“自我”、自私而委身于“天”的自在和谐之境（“则天去私”），表现出一个作家应有的社会责任感和执著、严肃的人生态度。

这里，从两类作品中各选一部代表作。《哥儿》通过一个不谙世故、坦率正直的鲁莽哥儿踏入社会后同周围俗物展开的种种戏剧性冲突，辛辣而巧妙地讽刺了社会上的丑恶现象，鞭挞了卑鄙、权术和虚伪，赞美了正义、直率和纯真。行文流畅，节奏明快，形象鲜明。通篇如坂上走丸，一气流注，而寓庄于谐，妙趣横生，至今仍是脍炙人口的作品，实为日本近代文学作品中不可多得的佳作。《心》则多少带有现今所说的推理色彩。“我”认识了一位“先生”，后来接得“先生”一封长信（其时“先生”已不在人世），信中讲述了“先生”在大学时代同朋友K一同爱上房东漂亮的独生女儿。“先生”设计使K自杀，自己如愿以偿。但婚后时常遭受良心和道义的谴责，最后也自杀而死。小说以徐缓沉静而又撼人心魄的笔致，描写了爱情与友情的碰撞、利己之心与道义之心的冲突，凸现了日本近代知识分子矛盾、怅惘、无助、无奈的精神世界，同时提出了一个严肃的人生课题。这部长篇可以说是漱石最为引人入胜的作品，至今仍跻身于日本中学生最喜欢读的十部作品之列。说得极端一点，假如没有《哥儿》和《心》，漱石能否“活”到今天还真是个疑问。

日本小说家中，较之诺贝尔文学奖获得者川端康成和大江健三郎，我更喜欢另外两个人：一个就是夏目漱石，一个是当代的村上春树。差不多二十年前在北国读研究生的时候，漱石全集便读了一集又一集；而村上小说，近年来则译了一本又一本。粗想之下，两人之间虽时隔八十余年，但确有若干共同点。一是态度的认真与坦诚。两人都认真对待人生和社会，不伪善，不矫情，不故弄玄虚，不掩饰自己。二是笔调的幽默和机警。一些作品都富于理性的、机智的、有教养的幽默感。外国有人称村上春树为“当代的夏目漱石”，想必主要着眼于这一点。三是描写对象大多都是都市里的小人物尤其是知识分子，都以传达其孤独、无奈、充满失落感的心态见长，而且两人同样是游离于文坛主流而独树



一帜、别开生面的作家。

正因为喜欢，多年来一直想将适合日语专业大学生课外阅读的《哥儿》和《心》这两篇以日汉对译形式另行付梓。而今承蒙中国宇航出版社好意，终于得遂夙愿。人生快事，教师之乐，莫过于此。

关于注释，主要根据本科二三年级的学力就词汇和语法之偏难者附以底注。释义参考了角川书店昭和49年版“日本近代文学大系”之《夏目漱石集》中的注释和有关辞书，亦多少有我的理解。包括译文在内，未必精当，谨资参考，欢迎指正。

2008年3月20日于窥海斋

时青岛垂柳初绿迎春花开



# 目 录

坊っちゃん.....1

哥儿.....133

v

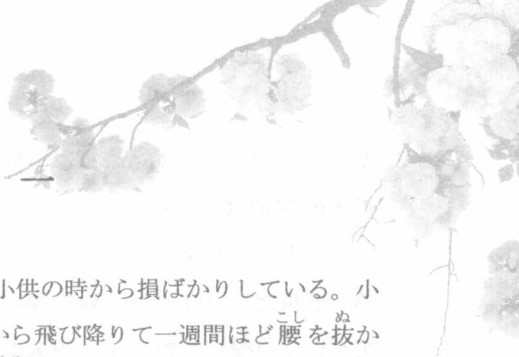




An abstract line drawing on a white background. The drawing consists of several thin, overlapping, curved lines that form a large, irregular shape. On the right side of this shape, there is a dark, circular area. Inside this dark area, the Japanese text '坊っちゃん' (Bakchan) is written vertically in white characters. The overall style is minimalist and artistic.

坊っちゃん



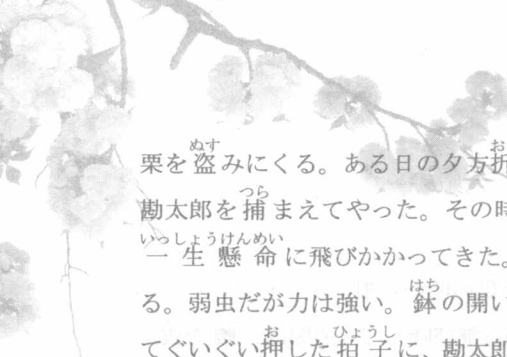


親譲り<sup>おやゆずり</sup>①の無鉄砲<sup>むてっぽう</sup>②で小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の二階から飛び降りて一週間ほど腰<sup>こし</sup>を抜かした事がある。なぜそんな無闇<sup>むやみ</sup>③をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段<sup>べつだん</sup>④深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談<sup>じょうだん</sup>に、いくら威張<sup>いば</sup>っても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫や一い<sup>はや</sup>。と囃<sup>はや</sup>したからである。小使<sup>こづかい</sup>に負ぶさって帰って来た時、おやじが大きな眼をして二階ぐらいから飛び降りて腰<sup>こし</sup>を抜かす奴<sup>やつ</sup>があるかと云<sup>い</sup>ったから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフを貰<sup>もら</sup>って奇麗<sup>きれい</sup>な刃<sup>は</sup>を日にかざ翳<sup>かざ</sup>して、友達<sup>ともだち</sup>に見せていたら、一人が光る事は光るが切れそうもないと云った。切れぬ事があるか、何でも切ってみせると受け合った。そんなら君の指を切ってみろと注文したから、何だ指ぐらいこの通りだと右の手の親指<sup>こゝろ</sup>の甲<sup>こう</sup>をはすに切り込<sup>こ</sup>んだ。幸<sup>さいわい</sup>ナイフが小さいのと、親指の骨<sup>かた</sup>が堅<sup>かた</sup>かったので、今だに親指は手に付いている。しかし創<sup>きず</sup>痕<sup>あと</sup>は死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き尽すと、南上がりにいささかばかりの菜園<sup>まんなか</sup>があつて、真中<sup>まんなか</sup>に栗<sup>くり</sup>の木が一本立っている。これは命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに背戸<sup>せど</sup>を出て落ちた奴を拾<sup>ひろ</sup>ってきて、学校で食<sup>く</sup>う。菜園の西側<sup>やましろ</sup>が山城屋<sup>やましろや</sup>という質屋<sup>しちや</sup>⑤の庭続きで、この質屋<sup>しちや</sup>に勘太郎<sup>かんたろう</sup>という十三四<sup>せがれ</sup>の倅<sup>せがれ</sup>が居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖<sup>くせ</sup>に四つ目垣<sup>よつめがき</sup>を乗りこえて、

- ① 親譲り：父母留下的（东西），父母的遗传，得自父母的。
- ② 無鉄砲：（名・形动）鲁莽，直性子，冒失，炮筒子脾性。
- ③ 無闇：（形动）胡闹，乱来，蛮干；分外，格外，特别。此处作名词用。
- ④ 别段：（副）べつだん。特别，格外。下接否定式。
- ⑤ 質屋：しちや。当铺，典当业。



栗を盗みにくる。ある日の夕方折戸の蔭に隠れて、とうとう勘太郎を捕まえてやった。その時勘太郎は逃げ路を失って、一生懸命に飛びかかってきた。向うは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢の開いた①頭を、こっちの胸へ宛ててぐいぐい押し拍子に、勘太郎の頭がすべって、おれの袷の袖の中にはいった。邪魔になって手が使えぬから、無暗に手を振ったら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡いた。しまいには苦しんで袖の中から、おれの二の腕へ食い付いた。痛かったから勘太郎を垣根へ押しつけておいて、足搦をかけて向うへ倒してやった。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分の領分へ真逆様に落ちて、ぐうと云った。勘太郎が落ちるときに、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になった。その晩母が山城屋に詫言に行つたついでに袷の片袖も取り返して来た。

この外いたずらは大分やった。大工の兼公と着屋の角をつれて、茂作の人参畠をあらした事がある。人参の芽が出揃わぬ処へ藁が一面に敷いてあったから、その上で三人が半日相撲をとりつづけに取ったら、人参がみんな踏みつぶされてしまった。古川の持っている田圃の井戸を埋めて尻を持ち込まれた②事もある。太い孟宗の節を抜いて、深く埋めた中から水が湧き出て、そこいらの稲にみずがかかる仕掛③であった。その時分はどんな仕掛か知らぬから、石や棒ちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へ挿し込んで、水が出なくなったのを見届けて、うちへ帰って飯を食っていたら、古川が真赤になって怒鳴り込んで来た。たしか罰金を出して済んだようである。

① 鉢の開いた：“鉢を開く”，托鉢化縁。此处应指头盖骨宽大。

② 尻を持ち込まれた：“尻を持ちこむ”，前来追究责任，要求善后处理。

③ 仕掛：此处意为装置，结构，机关，程序。



おやじに言付けた。おやじがおれを勘当する<sup>①</sup>と言い出した。

その時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り勘当されるつもりでいたら、十年来召し使っている清<sup>きよ</sup>という下女が、泣きながらおやじに詫まって、ようやくおやじの怒<sup>いか</sup>りが解けた。それにもかかわらずあまりおやじを怖<sup>こわ</sup>いとは思わなかった。かえってこの清と云う下女に気の毒であった。この下女はもと由緒<sup>ゆいしよ</sup>のあるものだったそうだが、瓦解<sup>がかい</sup><sup>②</sup>のときに零落<sup>れいらく</sup>して、つい奉公<sup>ほうこう</sup>までするようになったのだと聞いている。だから婆<sup>ばあ</sup>さんである。この婆さんがどうい<sup>いんえん</sup>う因縁<sup>③</sup>か、おれを非常に可愛がってくれた。不思議なものである。母も死ぬ三日前に愛想<sup>あいそ</sup>をつかした——おやじも年中持て余している——町内では乱暴者の悪太郎と爪弾<sup>つまはじ</sup>きをする——このおれを無暗<sup>むんちよう</sup>に珍重<sup>ちんちよう</sup>してくれた。おれは到底<sup>とうてい</sup>に好かれる性<sup>たち</sup>でないとあきらめていたから、他人から木の端<sup>はし</sup>のように取り扱<sup>あつか</sup>われるのは何とも思わない、かえってこの清のようにちやほやしてくれるのを不審<sup>ふしん</sup>に考えた。清は時々台所で人の居ない時に「あなたは真<sup>ま</sup>っ直<sup>すぐ</sup>でよいご気性だ」と賞<sup>ほ</sup>める事が時々あった。しかしおれには清の云う意味が分からなかった。好い気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろうと思った。清がこんな事を云う度におれはお世辞<sup>きり</sup>は嫌<sup>はし</sup>いだと答えるのが常であった。すると婆さんはそれだから好いご気性ですと云っては、嬉しそうにおれの顔を眺<sup>なが</sup>めている。自分の力でおれを製造<sup>ほこ</sup>して誇<sup>ほこ</sup>ってるように見える。少々気味がわるかった。

母が死んでから清はいよいよおれを可愛がった。時々是小供<sup>こ</sup>になぜあんなに可愛がるのかと不審に思った。つまらない、廃<sup>や</sup>せばいいのと思った。気の毒だと思った。それでも清は可

- ① 勘当する：原指断絶主仆、师徒、父子关系，后来专指断绝父子关系。
- ② 瓦解：瓦解。此处特指德川幕府的瓦解即明治维新。
- ③ 因縁：现在多作いんねん。

愛がる。折々は自分の小遣いで金鑿きんつぼや紅梅焼こうばいやきを買ってくれる。寒い夜などはひそかに蕎麦粉そばこを仕入れておいて、いつの間にか寝ている枕元まくらもとへ蕎麦湯を持って来てくれる。時には鍋焼餛飩なべやきうどんさえ買ってくれた。ただ食い物ばかりではない。靴足袋くつたびももらった。鉛筆えんぴつも貰った、帳面も貰った。これはずっと後の事であるが金を三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せと云った訳ではない。向うで部屋へ持って来てお小遣いがなくてお困りでしょう、お使いなさいと云ってくれたんだ。おれは無論入らないと云ったが、是非使えと云うから、借りておいた。実は大変嬉しかった。その三円を蝦蟇口がまぐちへ入れて、懐ふところへ入れたなり便所へ行ったら、すばりと後架こうか<sup>①</sup>の中へ落おとしてしまった。仕方がないから、のそのそ出てきて実はこれこれだと清に話したところが、清は早速竹の棒さきを捜して来て、取って上げますと云った。しばらくすると井戸端いどばたでざあざあ音がするから、出てみたら竹の先へ蝦蟇口の紐ひもを引き懸けたのを水で洗っていた。それから口をあけて沓いぢえんきつ円札かを改めたら茶色になって模様が消えかかっていた。清は火鉢で乾かして、これでいいでしょうと出した。ちょっとかいでみて臭くさいやと云ったら、それじゃお出しなさい、取り換かえて来て上げますからと、どこでどう胡魔化ごまかしたか札の代りに銀貨を三円持って来た。この三円は何に使ったか忘れてしまった。今に返すよと云ったぎり、返さない。今となつては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物をくれる時には必ずおやじも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌いだと云って人に隠れて自分だけ得をするほど嫌いな事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隠して清から菓子かしや色鉛筆を貰いたくはない。なぜ、おれ一人にくれて、兄さんには遣やらないのかと清に聞きく事がある。すると清は澄すま

① 後架：厕所，茅坑。因过去多位于寺院后面而得此名。

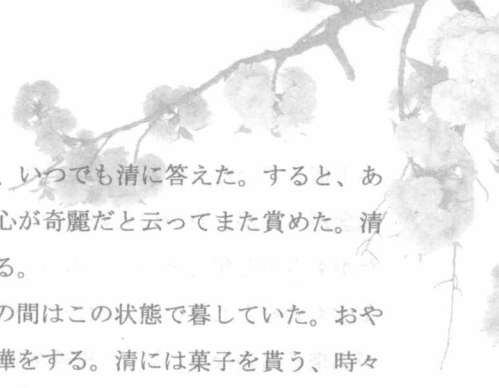
した<sup>①</sup>ものでお兄<sup>あにいさま</sup>様はお父<sup>とうさま</sup>様が買ってお上げなされるから構いませんと云う。これは不公平である。おやじは頑固<sup>がんこ</sup>だけれども、そんな依怙<sup>えこひいさま</sup>最負はせぬ男だ。しかし清の眼から見るとそう見えるのだろう。全く愛<sup>おぼ</sup>に溺<sup>ちが</sup>れていたに違いない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。単にこればかりではない。最負目は恐ろしいものだ。清はおれをもって将来立身出世して立派なものになると思い込んでいた。その癖勉強をする兄は色ばかり白くって、とても役には立たないと一人できめてしまった。こんな婆さんに逢<sup>あ</sup>っては叶<sup>かな</sup>わない。自分の好きなものは必ずえらい人物になって、嫌いなひとはきつと落ち振れるものと信じている。おれはその時から別段何になると云う了<sup>りょうけん</sup>見<sup>②</sup>もなかった。しかし清がなるなると云うものだから、やっぱり何かに成れるんだろうと思っていた。今から考えると馬鹿<sup>ばかばか</sup>馬鹿しい。ある時などは清にどんなものになるだろうと聞いてみた事がある。ところが清にも別段の考えもなかったようだ。ただ手車<sup>てぐるま</sup>へ乗って、立派な玄関<sup>げんかん</sup>のある家をこしらえるに相違<sup>そうい</sup>ないと云った。

それから清はおれがうちでも持って独立したら、一<sup>いっしょ</sup>所になる気でいた。どうか置いて下さいと何遍も繰り返して頼んだ。おれも何だかうちが持てるような気がして、うん置いてやると返事だけはしておいた。ところがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたはどこがお好き、麴<sup>こうじまち</sup>町ですか麻布<sup>あざぶ</sup>ですか、お庭へぶらんこをおこしらえ遊ばせ、西洋間は一つでたくさんですなどと勝手な計画を独りで並<sup>なら</sup>べていた。その時は家なんか欲しくも何ともなかった。西洋館<sup>にほんだて</sup>も日本建も全く不用であったから、

① 澄した：すます，集中（注意力）；装模倣様，装出若无其事、满不在乎的样子。此处意为后者。

② 了見：想法，主意，打算；心胸，胸怀，度量。





そんなものは欲しくないと、いつでも清に答えた。すると、あなたは欲がすくなくって、心が奇麗だと云ってまた賞めた。清は何と云っても賞めてくれる。

母が死んでから五六年の間はこの状態で暮していた。おやじには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を貰う、時々賞められる。別に望みもない。これでたくさんだと思っていた。ほかの小供も一概いちがいにこんなものだろうと思っていた。ただ清が何かにつけて、あなたはかわいそうお可哀想だ、ふしあわせ不仕合だと無暗に云うものだから、それじゃ可哀想で不仕合せなんだろうと思った。その外に苦になる事は少しもなかった。ただおやじが小遣いをくれないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやじも卒中で亡くなった。その年の四月におれはある私立の中学校を卒業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄は何とか会社の九州の支店に口があって行かなければならぬ。おれは東京でまだ学問をしなければならぬ。兄は家売って財産を片付けて任地へ出立しゅったつすると云い出した。おれはどうでもするがよかろうと返事をした。どうせ兄の厄介やっかいになる気はない。世話をしてくれるにしたところで、喧嘩をするから、向うでも何とか云い出すに極きまっている。なまじい<sup>①</sup>保護を受ければこそ、こんな兄に頭を下げなければならぬ。牛乳配達をしても食かくごってられると覚悟をした。兄はそれから道具屋を呼んで来て、先祖代々の瓦落多がらくたを二束三文にそくさんもんに売った。家屋敷いえやしきはある人の周旋しゅうせんである金満家<sup>②</sup>に譲った。この方は大分金になったようだが、詳しい事は一向知らぬ。おれは一ヶ月以前から、しばらく前途の方向のつくまで神田のおがわまち小川町

① なまじい：（副・形動）亦作なまじ。不上不下，半生不熟，浮皮了草，不充分；贸然，冒失，大可不必。此处意为前者。

② 金満家：きんまんか。有钱人，大财主，富翁，阔佬。